

<b>企画名称 (講演タイトル)</b>	東洋大学ボランティアカフェ ONLINE 「好きなことでボランティア！～旅+ボランティア=?～」第1,2回
<b>リソースパーソン</b>	赤羽 真萌さん（東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科2年、IVUSA 白山クラブ）
<b>モデレーター</b>	日比野 勲（東洋大学ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター）
<b>開催期間・日時</b>	第1回：2020年12月9日（水）10:40～12:10 第2回：2020年12月16日（水）10:40～12:10
<b>会 場</b>	Zoomによるオンライン開催
<b>目 的</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボランティアサークルの活動紹介の場の提供</li> <li>・学生のボランティア活動や社会貢献活動への一歩を踏み出す後押しをする</li> <li>・参加者、ゲスト間などボランティア活動に関心のある人同士をつなぎ、仲間づくりの機会とする</li> <li>・ゲストの取り組みに学びながら、ボランティア活動や社会貢献活動の多様性と魅力に気づく機会とする</li> </ul>
<b>参加者数</b>	第1回：3名 第2回：9名

#### 活動内容(概要)

好きなことや趣味を訊ねられて、「旅」や「旅行」を挙げる方は少なくないと思いますが、「旅」も形を変えると、スタディツアーやワークキャンプという形で、ボランティア・社会貢献活動につながる場合があります。今回のボラカフェは、そうした「好きなこと」で関わるボランティア・社会貢献活動を提案するというコンセプトで実施しました。

アイスブレイキングの意味合いを込めた9日を経て、16日はリソースパーソンの赤羽さんより、新潟県関川村への「旅」の話題を共有いただきました。

「旅」といっても、いわゆる観光旅行とは趣が違い、赤羽さんが所属する学生団体 IVUSA で取り組む、関川村での地域活性化活動に伴うものです。

IVUSA の関川村での活動は、過去に関川村出身のメンバーが所属していたことにありました。人口約 5300 人の関川村もまた、過疎化の影響が深刻化し消滅可能性都市にも加えられているという状況の中で、かつて IVUSA で活動していた村出身の学生の「自分の故郷を元気にしたい」という思いから、村の年中行事である「大(たい)したもん蛇(じゃ)まつり」の運営補助をはじめたことがきっかけとなって始まっています。そうした意味では、この活動もまた当時の学生が当事者として感じていた地域課題をなんとかしたいと思い、自発的にはじめられたものです。2014 年には IVUSA と関川村との間に、地域連携協定が結ばれ、相互に協力して地域振興を図ることや、災害時に協力することなどを確認するに至り、今年 IVUSA が関川村での活動を開始してから 17 年目を迎えました。

「大(たい)したもん蛇(じゃ)まつり」は夏に行われる年中行事で、全長 82.8 メートル、重さ 2 トンにも及ぶ大蛇を、神輿のように担ぎ、街を練り歩くお祭りです。82.8 メートルという長さはギネス記録にも認定されていま

すが、この数字は 1967 年 8 月 28 日の羽越大水害の惨事を次代へと語りつぐために設定されたものとのことです。

この祭りの運営に関わるために村を訪れる IVUSA メンバーは、数日間村に滞在し祭り以外にも村でさまざまな活動を行います。2019 年度は 4 日間滞在し、「孫の手ボランティア」と呼ばれる、村の方々の手の届かない地域の困りごとを学生が「孫の手」となって手助けするという活動や、村のお祭りの活性化について村民の方々とともに語り合う「未来サミット」の開催などを行います。IVUSA の関川村での活動は、夏だけでなく冬にも行われ、赤羽さんも冬は「七ヶ谷雪ほたる祭り」の活性化活動に関わった経験があり、夏同様に数日間村に滞在しながら、村民とともに村を盛りあげます。

関川村では、長年の活動により学生と地域との間に信頼関係が築かれてきました。学生が、自ら考え「自分ごと」として地域に関わるためには、地域で受け入れをされている方々が学生たちを尊重し、「任せる」場面を創出していることが大きいのではないかと考えます。「横」につながるボランティア活動を通してだからこそ、同じ関川村の未来を素敵なものにしたいという方向を、学生も地域の方々も一緒になって見ることができ、それが信頼関係を生むことにつながっているのではないのでしょうか。

活動を通じて赤羽さんが魅力を感じるのは、関川村が自分にとっての第 2 のふるさとになるという感覚と、村の未来に関われるという実感を得ていることだといいます。そして、関川村で考えたこと、学んだことを大学のキャンパスのある朝霞市周辺のコミュニティ形成にも活かせるのではないかと、という気づきを得ることができたといいます。非日常の「旅」の経験から、日常生活を送る中では見えてこなかった日常の姿が見えてくる、そんなきっかけになるのかも知れません。

(ボランティア支援室 ボランティアコーディネーター 日比野 勲)

